

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年2回発行



1. 令和5年度秋季企画展『邪馬台国時代の八尾—他地域の土器は何を語るのか—』から

邪馬台国時代は、「魏志倭人伝」に記載されている卑弥呼やその後の壹与が女王として活躍した頃で、弥生時代後期(2世紀)～古墳時代初頭(3世紀)にあたります。その後の古墳時代前期(4世紀)を含めた2～4世紀は、社会状況や政治体制が大きく変動した時期と言われています。

八尾市内の当該期の遺跡からは、南九州から関東地方まで広い範囲の地域から持ち込まれた土器が出土しており、各地域との活発な交流があったことが分かってきました。

今回は、八尾市内から出土した土器のうち、他地域から持ち込まれた土器、あるいは他地域の影響を受けた土器を紹介し、邪馬台国時代に河内が果たした役割について考えてみます。



図1 調査位置図

2. 弥生時代後期(2世紀 河内第V様式)

「河内第V様式」は弥生時代後期の土器様式で、無文化が進み、前半には長頸壺が、後半には手焙り形土器や二重口縁壺が出現します。他地域の土器には、吉備・讃岐・阿波・淡路・北近畿(写真1)・近江(写真2・3)・東海があげられます。当該期には、生駒山地西麓産胎土の壺が西日本の各地に搬出され、特に北近畿や因幡では墳丘墓から出土しており、河内との強い結びつきが考えられます。



写真1 北近畿系高杯(弥生時代後期中頃) 弓削遺跡第1次調査 溝S D301



写真2 近江系甕(弥生時代後期中頃)
弓削遺跡第1次調査 溝S D301



写真3 近江系手焙り形土器(弥生時代後期中頃)
弓削遺跡第1次調査 溝S D301

3. 古墳時代初頭(3世紀 庄内式土器)

「庄内式土器」は、古墳時代初頭の土器様式で、その存続期間は、土器編年や年輪年代測定法などから西暦 200～270 年前後と推定されています。この時期には、西部瀬戸内・吉備(写真4・5)・讃岐・阿波・山陰・淡路・近江(写真6)・北陸(写真7)・東海その他、朝鮮半島系の土器が出土しています。古墳時代初頭後葉(3世紀後葉)以降には、生駒山地西麓産の胎土を使用し、規格性が高い河内型庄内式甕が生産され、西日本の各地に流通しており、^{はりま}播磨(兵庫県南部)や^{ちくぜん}筑前(福岡県北西部)では在地系の庄内式甕を生み出す結果をもたらしました。



写真4 吉備系台付直口壺(古墳時代初頭前葉)
成法寺遺跡第29次調査 土坑S K108



写真5 吉備系高杯(古墳時代初頭前葉)
成法寺遺跡第29次調査 土坑S K108



写真6 近江系手焙り形土器(古墳時代初頭後葉)
東郷遺跡2009-187調査 井戸S E301



写真7 北陸系甕(古墳時代初頭中葉)
久宝寺遺跡第34次調査 土坑S K502

4. 古墳時代前期(4世紀 布留式土器)

「布留式土器」は、3世紀後葉に成立し、4世紀代を代表する土器様式です。庄内式土器と比べ規格化が進行した土器といえます。またこの時期に、小形器台、小形丸底壺、小形有段鉢の3種類の土器が盛行します。そして、南九州(写真11)・西部瀬戸内(写真9)・山陰(写真10)・東海(写真8)や関東地域などさらに広範囲の土器が持ち込まれるようになりました。



写真8 東海系甕(古墳時代前期初頭)
小阪台遺跡 2010-105 調査 井戸 S E 321



写真9 西部瀬戸内系壺(古墳時代前期初頭)
東弓削遺跡第24次調査 溝 S D 10



写真10 山陰系小形丸底壺(古墳時代前期初頭)
東弓削遺跡第24次調査 溝 S D 10



写真11 南九州系器台(古墳時代前期中葉)
東郷遺跡第64次調査 1溝

5. まとめ

弥生時代後期～古墳時代前期(2～4世紀)には、他地域の土器の出土が示すように、南九州から関東までの広範囲におよぶ地域間での相互交流があることが判りました。この内、河内と吉備は、『河内型庄内式甕』の成立や、特殊器台の流通に関わっていたことが推測できます。また河内と讃岐とは塩の流通、阿波とは朱(辰砂)の流通、淡路や北近畿および山陰とは、鉄素材や鉄製品の流通が考えられ、近江や東海とは、突線鈕銅鐸など青銅器の流通に関わった可能性が考えられます。さらに当該期には朝鮮半島との交流を示す朝鮮半島系土器が出土しており、貴重な資料と言えます。

以上のことから、当該期の河内は、西・東日本や朝鮮半島から物資が集まり、それらの物資を大和へ運ぶ交通の要衝として重要な地域であったと考えられます。

特殊器台形埴輪を発見！

東郷遺跡からは向木見型特殊器台(図2上)が、小阪合遺跡からは宮山型特殊器台(図2下)が、萱振遺跡からは都月型特殊器台形埴輪(写真12)が出土しています。

特殊器台や特殊器台形埴輪(図3)は、大和盆地南東部の初期大型古墳からの出土があり(図4)、河内は旧大和川水系を通じて物資を大和盆地南東部へ運ぶ中継地の役割を果たしていたと考えられます。

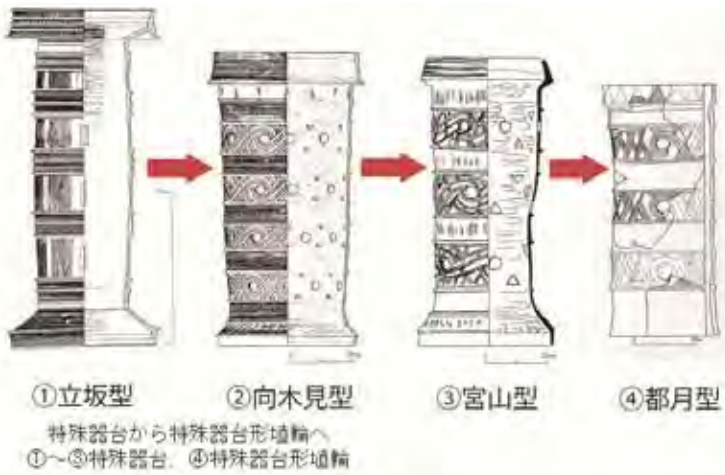


図3 特殊器台の変遷図

安原貴之 2011 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 特別陳列図録に加筆



図2 特殊器台実測図



写真12 都月型特殊器台形埴輪(古墳時代前期) 萱振遺跡第6次調査 第5層内出土

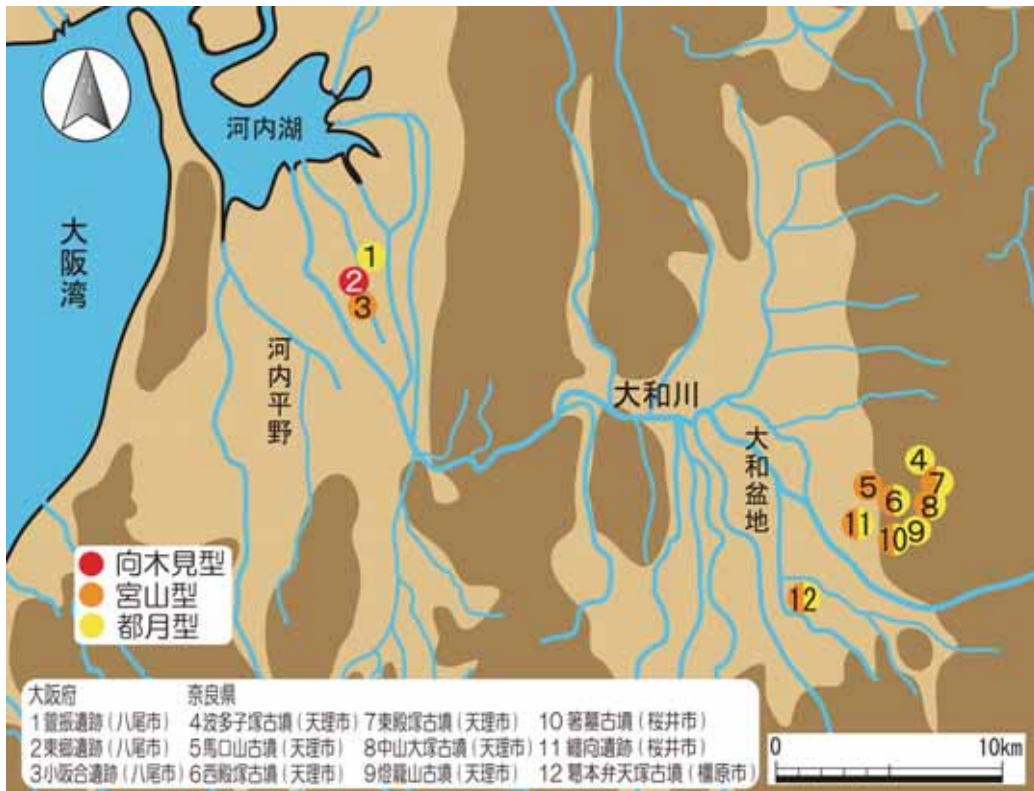


図4 河内・大和の特殊器台及び特殊器台形埴輪の分布図

八尾・よろず考古通信は今回が最終号となります。長い間ご購入いただきありがとうございました。



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌『八尾・よろず考古通信 30号』

発行：令和5(2023)年12月28日

八尾市立埋蔵文化財調査センター指定管理者 公益財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2

TEL・FAX 072-994-4700 E-mail: maibun_zyao@white.plala.or.jp